



Title	源順集諸本の親疎関係
Author(s)	宮澤, 俊雅
Citation	国語国文研究, 129, 1-15
Issue Date	2006-01-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93541
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_129-01-15.pdf



源順集諸本の親疎関係

宮 澤 俊 雅

一

『源順集』の諸本は大略七類に分けられる。即ち

- 1 続本 書陵部蔵「続小草内和歌」本 (五〇一・四九)
- 2 西本 西本願寺本三十六人集系諸本
- 3 定本 定家本系諸本
- 4 白本 冷泉時雨亭白描表紙本
- 5 上本 冷泉時雨亭上巻本
- 6 雅本 雅平本系諸本
- 7 仙本 正保板本歌仙家集本系諸本

これらのうち1続本、2西本、7仙本は本誌前稿⁽¹⁾にある通りである。3定本は坊本(冷泉時雨亭本⁽²⁾)、陵本(書陵部五〇一・二四三本)

及び尊本⁽³⁾、4白本・5上本はともに一類孤本であり、6は素本(冷泉時雨亭素寂本⁽⁶⁾)と御本(書陵部五一〇・一二本)である。

各本は相互に出入りはあるが、歌群ごとに諸本すべてを集成すると全部で四八の歌群にまとめられる。このうち二九群が七本総てに見られ、六本に見られるものが一群、五本に見られるものが六群、四本に見られるものが六群、二本にのみ見られるものが一群、一本にしか見られないものが五群となっている。白本・上本が零本であることを考慮すれば、四八群中の四二群が諸本のほとんどに見られる状況である。これによつて源順集の各本に内容的に大きな違いは無いことが分かり、諸本が一つの祖本を淵源としていることも承認出来るのである。しかしそれらの歌群がどのような順序で配列されているかを見ると、諸本総てが一致はせず、図1のごとき対応を示している。

図では歌群を上段と下段に分けて示したが、続本は上段を上巻、下段を下巻とし、一方、定本は下段を上巻とし上段を下巻としてい

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5		4	3	2	1		0		番					
誠信朝臣庚申哥	松雄君光武紀嬬哥	正通開基賄代詠	忠公朝臣屏風哥	第四親王子日哥	康保五年親王屏風哥	內裏親王內親王御料代詠	雨心探韻哥	同年前朱雀院姫宮屏風哥	応和二年任官歡喜哥		清原元真哀傷哥	天德四年内裏哥合哥	大納言家屏風哥	佐保山哥		天曆屏風哥	群名						
1	1	4	12	1	23	4	1	7	1		1	3	18	1		1	首						
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	41	40	5	4	3	2	39	1 38	37	36	35	続本		
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6			5	4	3	2		1				白本		
14	13	12	11		10	9	8	7	6			5	4	3	2		1				上本		
27	26	25	24	23	22	21	20	19	18		8	7		14	13	6	5	4	3	2	1	西本	
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17		7	6		13	12	5		4	11	3	2	1	定本
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13		6		7	5	4	3	2		1				雅本
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11		8		10	9	7	6	5	4		3	2	1	仙本
											41	40					39	38	37	36	35	34	番
											応和元年世間何喻哥	応和元年長哥					天曆五年梨盃封題	基盤哥	雙六盤哥	あめつち	西宮探韻	進上深	群名
											10	1					1	50	16	48	2	1	首

種類	例数	続本	西本	定本	白本	上本	雅本	仙本	種類	例数	続本	西本	定本	白本	上本	雅本	仙本
2	2	0	1	0	2	2	0	0	2	1	0	1	1	1	2	1	0
2	1	0	0	1	0	0	1	2	3	2	0	1	3	2	2	2	2
2	1	0	0	1	0	0	2	2	3	1	0	0	2	0	1	0	3
2	1	0	0	0	1	0	2	0	3	1	0	0	2	1	0	3	0
2	1	0	0	0	1	0	2	2	3	1	0	0	3	1	2	0	0
2	1	0	0	2	1	0	2	2	3	1	0	1	1	0	2	3	0
2	1	0	0	1	1	1	2	0	3	1	0	1	3	0	2	0	1
2	1	0	0	2	1	1	0	0	3	1	0	1	2	1	1	1	3
2	1	0	0	2	1	1	0	1	3	1	0	1	2	1	1	3	2
2	1	0	0	2	1	1	0	2	3	1	0	1	1	1	2	1	3
2	1	0	0	2	1	1	1	1	3	1	0	1	1	1	2	3	1
2	1	0	0	0	1	2	1	1	3	1	0	1	2	1	2	3	2
2	1	0	0	2	1	2	2	2	3	1	0	1	3	2	0	0	3
2	1	0	1	1	0	0	2	0	3	1	0	1	1	2	1	1	3
2	1	0	1	2	0	0	2	0	3	1	0	1	3	2	1	2	2
2	1	0	1	1	0	1	1	2	3	1	0	1	1	2	2	1	3
2	1	0	1	2	0	1	1	0	3	1	0	1	2	2	2	1	3
2	1	0	1	0	0	2	0	0	3	1	0	1	2	2	2	2	3
2	1	0	1	0	0	2	1	1	3	1	0	1	2	2	2	3	3
2	1	0	1	2	0	2	0	0	3	1	0	1	3	2	2	0	0
2	1	0	1	2	0	2	0	2	3	1	0	1	3	2	2	0	3
2	1	0	1	1	1	0	2	1	3	1	0	1	3	2	2	1	1
2	1	0	1	2	1	0	0	0	3	1	0	1	3	2	2	1	2
2	1	0	1	2	1	0	1	1	3	1	0	1	3	2	2	2	1
2	1	0	1	2	1	1	2	1	3	1	0	1	3	2	2	3	3
2	1	0	1	1	1	2	0	1	3	1	0	1	1	2	3	1	1
2	1	0	1	2	1	2	2	2	3	1	0	1	2	2	3	2	2
2	1	0	1	1	2	0	0	0	3	1	0	1	3	2	3	3	0
2	1	0	1	0	2	1	0	0	4	1	0	1	3	2	2	2	4
2	1	0	1	1	2	1	1	2	4	1	0	1	1	2	3	4	4
2	1	0	1	0	2	2	0	1	4	1	0	1	4	2	3	3	0
2	1	0	1	0	2	2	0	2	4	1	0	1	4	2	3	3	2
2	1	0	1	2	2	2	0	2	5	1	0	1	3	2	3	4	5
2	1	0	1	2	2	2	2	1									

表1 七本異文分類對照表

種類	例數	統本	西本	定本	白本	上本	雅本	仙本	種類	例數	統本	西本	定本	白本	上本	雅本	仙本
0	142	0	1	1	1	1	1	1	1	2	0	1	1	1	0	0	0
0	112	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	1	1	1	0	1	1
0	97	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	1	0	1	1	0	0
0	60	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	1	0
0	38	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	1	1	0	1	1
0	43	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	1	1	1
0	55	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	1	1	0	0
1	17	0	0	0	1	1	0	0	1	1	0	1	1	0	0	1	0
1	14	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	0	1	0	0
1	14	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	0	1	1	0
1	7	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0
1	6	0	1	0	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	0
1	6	0	1	1	1	1	1	0	1	1	0	1	0	1	1	0	1
1	5	0	1	1	0	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	1	0
1	4	0	0	1	0	0	1	1	1	1	0	0	1	1	1	0	1
1	4	0	0	1	0	1	0	0	2	14	0	1	2	2	2	2	2
1	4	0	0	1	1	1	1	0	2	8	0	1	1	2	1	1	1
1	3	0	0	0	0	1	1	0	2	7	0	1	1	1	1	1	2
1	3	0	0	1	1	0	0	0	2	7	0	1	1	1	2	1	1
1	3	0	1	0	0	0	0	1	2	6	0	1	2	1	1	1	1
1	3	0	1	1	0	0	0	1	2	6	0	1	1	2	2	2	2
1	3	0	1	0	0	1	0	0	2	5	0	0	1	0	0	0	2
1	3	0	1	0	0	1	0	1	2	5	0	1	2	0	0	0	0
1	3	0	1	1	1	1	0	1	2	4	0	0	0	0	0	1	2
1	2	0	0	1	0	0	0	1	2	4	0	0	2	0	1	0	0
1	2	0	0	0	0	1	0	1	2	4	0	0	0	1	0	0	2
1	2	0	0	1	0	1	1	1	2	3	0	0	1	0	0	2	0
1	2	0	0	0	1	1	0	1	2	3	0	0	0	0	1	0	2
1	2	0	0	0	1	1	1	0	2	3	0	1	0	0	0	0	2
1	2	0	1	0	0	0	1	0	2	2	0	0	0	1	1	0	2
1	2	0	1	0	0	0	1	1	2	2	0	0	0	1	2	0	0
1	2	0	1	1	0	0	1	1	2	2	0	1	0	0	0	2	0
1	2	0	1	1	0	1	0	1	2	2	0	1	0	1	1	1	2
1	2	0	1	0	1	0	1	1	2	2	0	1	2	1	2	2	1

る。白本は上段のみで、僚卷の存否を定かにしない。上本も上段のみであるが「従五位行みなもとの朝臣したかふ集上」と上巻である旨銘記され続本と同配列と認定される。西本諸本は上下二巻に分けることなく定本と同じ配列で書承されている。祖本の西本願寺本も現状は定本の配列であるが、これは下段分末尾と上段分冒頭の切り出し（岡寺切・楮色紙）の後を補修したものであり、原態であると確定することはできない。雅本・仙本の配列は続本・定本の上下の各配列を交互に繰り入れた形（逆に言えば、続本・定本の上下の雅本・仙本の配列を上下二種の配列に振り分けた形）となっている。そこで諸本の外形上から次の六種の対立が確認され、その書承・系統の先後関係を明らかにすることが必要になる。

- A 定本↑↓続本・上本
 1 続本・上本↓定本 偶発的 上下二冊の取り違い
 2 定本↓続本・上本 偶発的 上下二冊の取り違い
 白本↑↓続本・上本・西本・定本・雅本・仙本
 1 諸本↓白本 偶発的 二冊本の一冊のみが独立
 2 白本↓諸本 改定編集 白本が原形で諸本は増補
 雅本・仙本↑↓続本・上本・西本・定本・雅本
 1 続本等↓雅本等 改定・編集 年代順配列の徹底
 2 雅本等↓続本等 改定・編集 特殊歌郡の分立
 続本↑↓西本・定本・雅本・仙本
 1 続本↓西本等 改定・編集 歌合を増補
 2 西本等↓続本 改定・編集 歌合の削除

- E 西本↑↓続本・定本・雅本
 1 続本等↓西本 改定・編集 基盤歌の増補
 2 西本↓続本等 基盤歌の削除（改定・編集）
 基盤歌の脱落又は書写忌避（偶発的）
 F 仙本↑↓続本・西本・定本・雅本
 1 続本等↓仙本 双六盤歌の削除（改定・編集）
 双六盤歌の脱落又は書写忌避（偶発的）
 改定・編集 双六盤歌の増補
 2 仙本↓続本等

これらの対立を組み合わせた六四通りの総ての諸本関係が想定される訳ではない。例えばD1が成立すれば自動的にA1が成立するし、またもしD1が正しいならばC2は立証されるはずがない、等である。これらを勘案すると、少なくとも次のような分類対立を想定することはできる。

- 続本↑D↓白本・上本・西本・定本↑C↓雅本↑F↓仙本
 Dは西本等での歌合の増補（D1）、Fは仙本での双六盤歌の脱落（F1）、と見る方が自然であるから、七本四類の書承は基本的には

続本・増補↓白本・上本・西本・定本↓改編・雅本↓削除↓仙本
 と想定する方が無難であると言えよう。

二

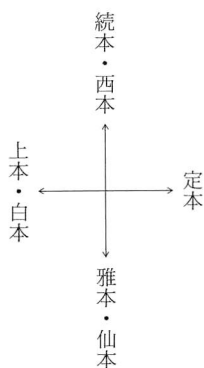
外形上の対立の外に、本文の字面そのものの対立状況からも、諸本の書承の關係を見ることが出来る。

七本総てに見られる四七群について対立異文を分類集計したのが、表1である。表の左第1欄の「分類」欄では、0は独自異文、1は双立共通異文、2は鼎立異文、3は四立異文、4は五立異文を示す。第2欄にはその右に示した異文対立が何例あるかを示してある。異文対立を示す欄では、続本及び続本と同じ本文を0で、異なるものを1で示した。独自異文は続本一四二例、西本一一二例、定本九七例、白本六〇例、上本三八例、雅本四三例、仙本五五例。共通異文合計一四〇例である。表1では省略したが、この他に鼎立異文一二五例、四立異文二八例、五立異文四例、六立異文一例。以上総計して異文対立箇所は八四五例である。

一四〇例の共通異文の中では次の対立が比較的多い。

一七例 続本・西本・定本・雅本・仙本 ↑↓ 上本・白本
 一四例 続本・西本・定本・白本・上本 ↑↓ 雅本・仙本
 一四例 続本・西本 ↑↓ 定本・白本・上本・雅本・仙本

これにより、七本の異文対立は



となる。

三

次に異文の数により、各本の距離關係を見ると、続本を起点に、仙本を終点にした場合は表2.1のようになり、

続本・西本 ↑↓ 白本・定本・上本 ↑↓ 雅本・仙本

の順に並ぶ。一方、続本を起点に、上本を終点にした場合(表2.2)は、

続本・西本 ↑↓ 仙本・定本・雅本 ↑↓ 白本・上本

の順に並ぶ。

なお、上本を起点に、仙本を終点にした場合(表2.3)は、

表 2 関係距離表

2.1

	続本	仙本	本線	支線
続本	0	396	0	0
西本	432	347	481	383
白本	392	286	502	282
定本	437	323	510	364
上本	386	269	513	259
雅本	371	220	547	195
仙本	396	0	792	0

2.2

	続本	上本	本線	支線
続本	0	386	0	0
西本	432	335	483	381
仙本	396	269	513	279
定本	437	302	521	353
雅本	371	231	526	216
白本	392	205	573	211
上本	386	0	772	0

2.3

	上本	仙本	本線	支線
上本	0	269	0	0
白本	205	286	188	222
定本	302	323	248	356
西本	335	347	257	413
続本	386	396	259	513
雅本	231	220	280	182
仙本	269	0	538	0

2.4

	西本	雅本	本線	支線
西本	0	321	0	0
続本	432	371	382	482
定本	369	285	405	333
上本	335	231	425	245
白本	354	249	426	282
仙本	347	220	448	246
雅本	321	0	642	0

2.5

	西本	白本	本線	支線
西本	0	354	0	0
定本	369	331	392	346
続本	432	392	394	470
仙本	347	286	415	279
雅本	321	249	426	216
上本	335	205	484	186
白本	354	0	708	0

2.6

	白本	雅本	本線	支線
白本	0	249	0	0
続本	392	432	209	575
上本	205	231	223	187
西本	354	321	282	426
定本	331	285	295	367
仙本	286	220	315	257
雅本	249	0	498	0

の順に並ぶ。これにより、七本の関係は

上本・白本 ↑↓ 定本・西本・続本 ↑↓ 雅本・仙本

定本

続本・西本
雅本・仙本

上本・白本

となる。

なお、起点・終点を西本、白本、雅本とした場合は

西本・続本 ↑↓ 定本・上本・白本 ↑↓ 仙本・雅本

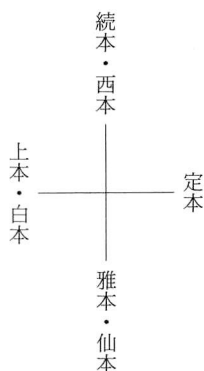
となり、続本の位置が安定しない。

四

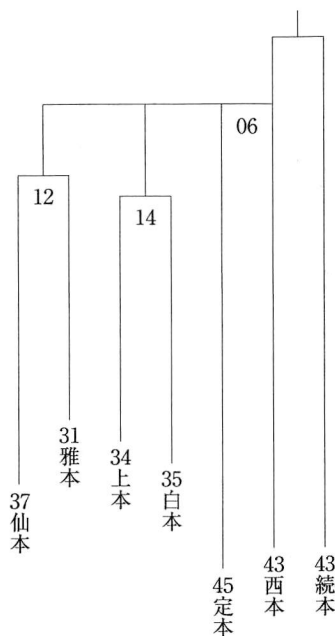
以上、

続本→増補→白本・上本・西本・定本→改編→雅本→削除→仙本

と



の関係をまとめ、異文数の比を距離の比に置き換えると次のようになる(仮に西本と統本の距離の midpoint を祖形との接点とした)。基本的には前稿(以下「諸本考」という)での提示と同じであり、白本・上本が加わったため、より鮮明になったと言える。



五

「諸本考」では、統本・西本・定本・雅本(御本)・仙本の五本について右とほぼ同様の系統関係を示し得た。今回、新出の上本・白本を加えた結果、統本と西本が系統的に近いことが見えて来たが、「諸本考」において既に、順集の始原に『続小草』を立てることにより、『続小草』↓統本↓西本↓雅本・仙本という流れを提示し、その流れの中に従前の西本・仙本の先後論争を解消せしめたのであった。すなわち「諸本考」は『源順集』の研究史上、

- 1 五類の諸本の関係を提示したこと。
- 2 統本を原初の形態としたこと。
- 3 『源順集』が『続小草』に載る和歌を資料として成立した(他撰)と推測したこと。
- 4 西本系諸本の書承系統関係を明らかにしたこと。
- 5 仙本系諸本の書承系統関係を明らかにしたこと。
- 6 前栽歌合は『源順集』の改編の度毎に増補・差替が行われたと推測したこと。

についてオリジナリティ乃至プライオリティを有している。

「諸本考」以前の『源順集』の諸本研究は諸本の系統を究めるといふよりは、分類を先とし、分類をそのまま系統と誤認するていの意見表明であった。『源順集』諸本が五本あることを知りながら、倉卒

に二類に分ち、西本・仙本を論拠もなくそれぞれの代表本と決めつけ、西本と仙本の先後さえ決めれば事足りりとするものであったが、「諸本考」は、異文分布の状況から五本の相互の関係を明らかにし、仙本↓西本↓統本↓統小草、という書承の成り立ち難いことから、統小草↓統本↓西本↓仙本、という書承に基づき、もはや「支持論証」をする必要のなくなった新藤説の当否は差し置き、背馳する島田説・間説が学的論証に耐えられないことを指摘したのであった。

しかしながら「諸本考」以後の多くの『源順集』関係の論考では、筆者の論旨が殆ど受け入れられることがなかった。「諸本考」は筆者がそれまで倭名類聚抄を例に行ってきた「古典字分け遡源法」の手法を援用して『源順集』の本文遡源を試みたものである。その時点で筆者は和名抄の諸本について既に六編の論があり、これらを見ずしての「諸本考」への反論は無意味であることは認識して頂きたい（和名抄の諸本研究は二〇〇〇年時点で一七編の論によって一応終結させている。外に他の典籍の諸本研究も若干あるので参照願いたい）。

六

「諸本考」の直後に出た、それまで『源順集』の諸本研究については無言であった『源順集』研究家の西山秀人氏による「源順集」小考⁶⁾は、全くの勇み足であり、論駁するのに忍びないものがある。中古学会で隆盛の「善本主義」「テキスト批評」に盲従して「諸本考」へ

の「反論」を誣い上げたものであり、その中で西山氏は「諸本考」を新藤説を支持する論であると矮小紹介し、西本等が屏風歌とする「千鳥なく」の歌が屏風歌ではあり得ないと「考証」し、「宮澤氏の論拠はやはり疑問とせざるを得ないのである」として、この一事のみで、読者に「諸本考」全体が無価値であると思わせるように陳述しているのである。

そして、西山氏は「諸本考」の論旨には一切触れることなく、結果として仙本先行説を温存させる方向に貢献したのである。確かに氏は西本先行説を否定してはいないが、論証もしていない。にもかかわらず、「稿者（西山）は旧稿『源順集』小考」……でも述べたように西本原態説を支持するが、その具体的検討については他日を期したい。」⁷⁾としたり、「諸本考」が無いかの如くにして統本の古態性を主張したりして自らの行く手を狭めているのである。

西山氏がテキスト批評で扱った「屏風歌」の部分の諸本比較は次の通りである（異同を明示するため、表記——漢字か仮名か——は統一した）。なお、「けふとくる……」の立春歌は仙本以外では『源順集』の巻頭歌であることに留意されたい。

天曆—御時—御屏風—和歌（統本・西本・定本）
天曆—御時の—屏風の—哥（白本）
天曆—御時—屏風の—哥（雅本）
天曆—時—御屏風—哥（仙本）
天曆の御時—屏風—哥（上本）

立春——日(続本・仙本)

立春——(西本)

春たつ日(上本・雅本・仙本)

春立——(定本)

けふとくる　こほりにかへて　むすふらし

こほりにそへて (定本)

みつにかけてそ (西本)

ちとせのはるにあはむちきりを

千——よのはるに(定本)

は(定本)

ちとせのすゑに(白本)

さほやま——長——谷寺——詣——よむ(続本)

さほやま——は——せ寺にまうてて——(西本)

さほやま——は——せ——まうてによむ(白本)

さほやまを——は——せ——ま——てによむ(仙本)

さほやま——はつせ——まうてに——(上本)

さほやま——はつせ——ま——てによむ(定本)

——(雅本)

ちとりなく　さほのかはきり　さほやまの

もみちはかりは　たちなかくしそ

雅本・仙本は「ちとせのはるに　あはむちきりを」の後に梨壺封題が入るので佐保山の歌は屏風歌として扱われてはいない。雅本は「さほやま……」の詞書きが無いため、梨壺封題関連の歌のように仕組まれているが、今ひとつ分かりにくい。仙本では源順が長谷詣での途次に詠んだというプライベートものとなっており、他にこの種の歌が『源順集』中に無いため、「宙に浮いている」のである。仙本先行説はこのことの理由を説明する必要がある。対して、雅本・仙本以外の諸本では、明らかに屏風歌として扱われているのであるから、続本・西本先行説では、屏風歌なのになぜ「長谷寺詣詠む」などと私的な事柄が記されているのかを説明できればよいわけである。

『源順集』には屏風歌が多いが、それらは天暦御時御屏風歌を別にすれば、総て屏風歌の料歌であり、それぞれに一連のものとして残されている(大納言家屏風歌一八首―応和二年前朱雀院姫宮屏風歌七首・康保五年親王屏風歌二三首・忠公朝臣屏風歌一二首・永観元年一条大納言家屏風歌九首・天元二年宣旨屏風歌二一首)。屏風又は「屏風歌」ジャンルから直接の書承を経て伝えられたものではなく、料歌に応募した際に源順が残しておいた控えを淵源としているのである。源順は天暦御時御屏風歌にも応募したが、その控えは残されていない。周知のごとく、天暦(または村上)御時御屏風歌の募料には月次屏風と国々所々屏風との二種があり、『源順集』の立春歌は前者、佐保山歌は後者に比定できる。どちらも連作応募でありながら一首ずつしか載せていないこと、立春歌が能宣の作らしいこと、佐保山歌が長谷詣での際の作歌らしいこと等を勘案すれ

ば、『源順集』での天曆屏風歌採録の事情もある程度推測できよう。
『続小草』には天曆御時御屏風の料歌は載っていないかったであろう。そしてその募料以前に、能宣が立春歌を詠み、源順が長春詣での途次に佐保山歌を詠んだことがあって、それらの歌を後に屏風料歌として出したことが『続小草』には記されていたのであろう。『源順集』の最初の編者は、能宣の歌を源順作と誤認して巻頭立春歌とし、佐保山歌も天曆屏風歌ということで立春歌の次に配置したものと思われる。

七

一九九五年に定本の祖本と目される冷本の影印が刊行された。⁽²⁾ 陵本と比較すると約三〇の相違が見いだされるが、諸本関係を変更させる程のものではない。陵本に基づいていた時には定本の本文に特異なものや誤写らしきものが多く、陵本の写しの悪さが懸念されたが、むしろ誤写は少なく、特異性は冷本に由来することが判明した。影印の解題で田中登氏も、冷本は「その親本自体がテキストとして必ずしも優れたものではなかった」らしいこと、陵本は冷本「の姿をできるだけ忠実に再現すべく、一種の複製本を製作することを意図したもの」と了解される」ことを述べ、ケアレスマスと見られる異同十数例を挙げている。また、田中氏は「諸本考」での指摘には触れずに、続本が平安時代まで遡り得ることは認めている。

なお、田中氏は

切り取られてわずかに残った料紙の部分に、横向きに「き」と判読できる文字が見えるので（二三参照）、この切り取られた二丁には基盤歌が書写されていた可能性が強い。

としているが、この切り端の綴じ目で隠れた部分が扉裏左端に見えるのでこれと重ね合わせると「（やまさと）にた（かうちかへす）」「（お）きつな（み）」と読めるので双六盤歌を書き損じたものと見てよい。

尊本は西山氏が陵本のように「複製本を製作しようという意図は幾分弱まっている」として紹介している。⁽⁷⁾ 冷本との異同は七〇例程で、冷本の曖昧な字形を陵本と同じに誤写したところも数例あるが、冷本からの直接の写しと見てよいようだ。

八

上本・白本は二〇〇一年に影印が刊行された。⁽⁴⁾ その解題で田中氏は、続本との歌の出入りを遺繰りして諸本の系統立てを推断しているので、ここでは先に続本上巻歌の西本・定本・白本・上本との対比を示しておく。いずれも「けふとくるこほりにかへて」を一番とした通し番号で、いずれかの本で欠けている歌を一覧すれば次のようになる。

諸本 歌数	続本 140首	西本 134首	定本 136首	白本 130首	上本 134首
----------	------------	------------	------------	------------	------------

ではないことは、十分理解していただけたかと思う。

と五本の歌序が一致していることすら確認してないらしい。また、下巻末の断簡から、上本の巻末に『好忠集』から「源順百首」が転載増補されていたと推論できるところを、続本の下巻巻末が「天曆庚申歌」（これも増補）と異なっているから「両本はけっして同一系統の本として扱うことができないことが明白になった」と宣言している。

白本には乱脱がある。文序を訂して示せば次の通りである（丁付、0406は四丁オ6行、1215は十八丁ウ5行）。

正序	本文	行数	丁付け	現序
1	天曆御時の	54	0101～0406	1
2	ちはやふる	26	1704～1815	7
3	十月あしろ	26	1513～1704	6
4	わかこまの	29	1316～1512	5
5	まさみちま	62	0916～1315	4
6	あひた八月	68	0512～0916	3
7	ねうことの	21	0406～0512	2
8	有月風千里	110	2604～3301	8

「5まさみちま」侍従のかり」の部分には途中10行分ほどの脱文があり、これは乱脱後の脱文とも考えられ、乱脱は二代前の書本に溯るとも見込まれるため、綴葉の綴じ違いか、粘葉の糊離・破断か確

定できない。

田中氏は解題で、乱脱を見つけ出す過程に多くの筆を費やしているが、正序された異本があれば乱脱は簡単に見分けられる。解題で正序を明示すべきであろう。さらに田中氏は

白本の本文自体……結論的にいって、白本は続本もしくは上本のどちらかに近いということではなく、続本とも様々な異同を示しているのである。白本は続本の上巻部に当たるといっても、決して続本ないしは上本の系統に属させられるような性格のものではないのである。

といっている。総じて、諸本研究に対処する明確なスタンスが感ぜられない。

同じ二〇〇一年に仙本の古写本である資経本の影印が刊行された。⁽⁸⁾この本は仙本の中では独自異文の多い本であるが、「諸本考」で示した諸本の、書陵部本（五〇一―一二七二）と他の諸本との対立のうちの、書陵部本の側に属している。仙本の祖形を考えるには重要な本である。

雅本は、御本の親本にあたる素本の影印が二〇〇四年に刊行された。⁽⁵⁾素本と御本の異同は三〇例程。「諸本考」の記述を変更する程の量では無いが、確実に善本文としての遡上をしている。

注

- 1 「源順集諸本考」(国語国文研究八八号、一九九一年三月)
- 2 『冷泉家時雨亭叢書 第十六卷 平安私家集 三』一九九五年8月、朝日新聞社。
- 3 国文学研究資料館マイクロフィルム二九六―九〇〇―一〇。
- 4 『冷泉家時雨亭叢書 第二十一卷 平安私家集 八』二〇〇一年2月、朝日新聞社。
- 5 『冷泉家時雨亭叢書 第七十二卷 素寂本私家集 西山本私家集』二〇〇四年4月、朝日新聞社。
- 6 西山秀人「『源順集』小考」語文81、一九九一年12月。
- 7 西山秀人「伝二条為氏筆順集切」学海13、一九九七年3月。
- 8 『冷泉家時雨亭叢書 第六十六卷 資経本私家集 二』二〇〇一年6月、朝日新聞社。

(みやざわ としまさ・北海道大学教授)